

山と博物館

第52巻 第10号 2007年10月25日

市立大町山岳博物館



ライチョウ

撮影 平瀬貴志

「第8回ライチョウ会議長野大会」 の開催

ライチョウ会議事務局

8月18日(土)、19日(日)の2日間、第8回ライチョウ会議長野大会が大町市で開催されました。千葉、大阪、鳥取など遠方からも含め、2日間で計219名の参加者がありました。

今大会のテーマは、「ライチョウと高山環境をいかにして守るか」というもので、以下の3部で構成されました。第1部は「ライチョウの生息域内保全と生息域外保全の連携」で、野外調査、生息域内と高山環境のモニタリングの必要性について考察しました。第2部は「高山に何が起きているのか」として、高山の環境変化や、シカなど野生動物の高山進出による植生破壊の問題など、ライチョウのおかれている現状を把握しました。第3部のシンポジウムでは、「ライチョウの保護と高山環境の保全」と題した基調講演がありました。カナダの研究者による、北米のライチョウ類の生態についての発表で、海外と日本のライチョウの生息環境の差異などを窺い知ることのできる、国際的視野を交えた幅広い内容でした。いま日本の高山がどのような状況にあるのかを把握し、なぜ今ライチョウを保護することが重要なのかについて、認識を深めました。

大町市で開催されたこともあり、大町山岳博物館のライチョウ飼育再開についての話題に関心が多く集まりました。現在凍結されている大町市でのライチョウ飼育再開の必要性、再開するにあたり感染症対策としての複数の動物園などでの飼育、大学など研究機関との協力体制の構築などの意見が出されました。

生息域内保全については、行政関係者の立場からは、現状を把握した上で、具体的な対応策を考えるという手順が必要であり、南アルプスのシカによる植生被害問題の現状を考えると、今から早急に対応しないと手遅れになる、との意見があげられました。大会の場では、誰が何をするのかの結論を出すまでには至りませんでした。個々の立場において今直ぐにできることから始めること、また、一般市民に向けて具体的に何をしたらよいのか指示を出す必要性がある、といった意見も会場から聞こえました。ライチョウだけでなく、高山環境全体の保全について考える、よい機会になったと思います。

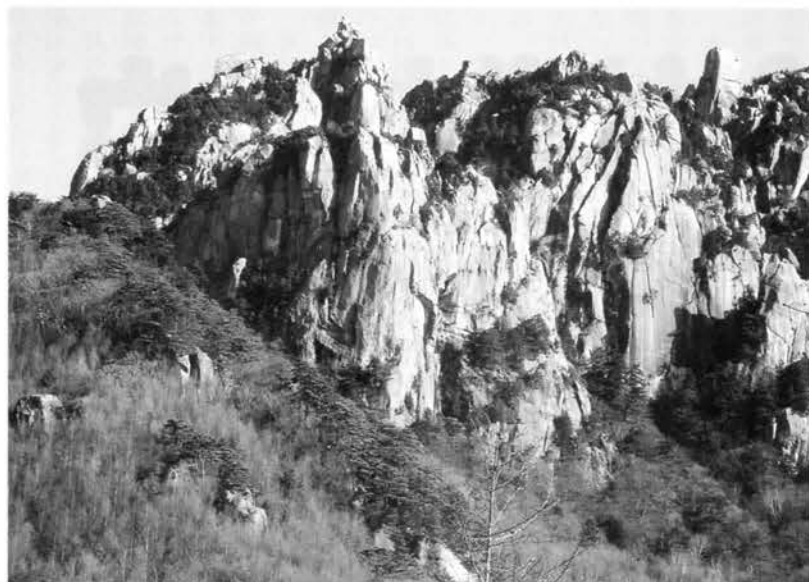
クラックの横にボルトはいらない

中嶋 岳 志

奥秩父の西端に聳える瑞牆（みずがき）山は個性的な山容と美しいシヤクナゲで知られている。岩登りの対象として見れば、針葉樹の原生林の中に花崗岩の岩峰が聳え立ち、非常に魅力的な山だ。一九七〇年三月、東京ハイピーク・クラブにより大ヤスリ岩が初登攀されたのを端緒として、これまでに数百本のルートが開拓されている。

その一角、不動沢にある前絵星岩に、この夏新たな埋め込みボルト（以下ボルト）が追加された。私は、新たなボルトが打たれたことを友人から聞き、耳を疑った。あの岩に何故ボルトを。

その後、瑞牆山に足繁く通っている有志数名によりボルトは撤去され、現在に残っていない。しかし、打った人物が誰だか分からず、抗議することもないので、また新たなボルトが打たれる可能性もある。それをまた抜いたらイタチごっこが繰り返されるかも知れない。



瑞牆山の岩場

「新緑荒野」は、清水博と宮坂幸夫により開拓された前絵星岩の初登ルートである。一ピッチ目は左上するバンド状（コーナー）にはクラックから木の生えたチムニー、そしてオーバーハンク気味のクラックをラープやナッツを使って登っている。新たなボルトはバンド状の三メートル左から二列、「新緑荒野」と交差する形で打たれていた。

「ジキル博士」は、清水と南裏健康により初登されたワイドクラックでグレードは5.9である。初登時には隣にあるク



埋め込みボルト

前記二ルートが初登されたのは一九八〇年のことである。二五年間以上もボルトを使わずにフ

ック（ハイド氏）と合わせ逆U字クラックと呼んでいた。清水と南裏は、当時最新式だったフレックスをプロテクションとして、奮闘の末フリークライミングに成功したが、ボルトは全く使わなかったし、他の支点も何一つ残置しなかった。私は初登攀の翌週、彼らと共に「ジキル博士」と「ハイド氏」を登り、内容の濃さと岩の美しさに感動したことを覚えている。新たなボルトは、このクラックにそつ

て二本打たれていた。三〇年前、唐沢岳幕岩の「大凹角」ルートは三ピッチ目（洞窟の上のピッチ）には小さなハンクを乗り越す難しいフリークライミングがあった。冬期登攀を共にした先輩が、ここを素手になって叫びながら登っていった姿を私は今でも覚えている。一年後、別の友人が「大凹角」を冬に登ったと聞き、私は興奮して尋ねた。小ハンクをどう登ったか知っていたのだ。三ピッチ目の小ハンクはどうだったか。

「ああ、あそこはボルト打ったよ。」

そして小ハンク



前絵星岩に打たれたボルト（丸印内）

はあぶみを使って登るのが普通になってしまった。「S字」も「畠山」も他の「みんなの物になった岩場」でも多くのルートが同じような運命をたどっている。七〇年代、私たちはボルトに埋まった岩場にうんざりしていた。そんな時出会ったのがフリークライミングだったのだ。

小川山で、城ヶ崎で、瑞牆山で、ボルトを最小限の本数しか使わないスタイル（以下ミニマムボルト）によるフリークライミングが実践されていった。

しかし、八七年を境に小川山は（いや日本中の岩場が）新しいボルトの波にのまれてしまった。フリークライミングをするために岩場をロープで下降しながら電動ドリルを使ってボルトを打つ。これが新しいボルトの打ち方であり、瞬く間に全国に波及していった。

現在、小川山では、人気ルートの多くはボルトが打たれたフェイスである。訪れるクライマーにとって、ルートにボルトがあるのは当然であり、そのボルトがどうやって打たれたのか、どんなドラマがあったのか、あるいは無かったのかなど誰も考えない。ボルトが打たれているのは難しいルートばかりではない。簡単やフェイスにも、ナッツやカムで十分安全を確保できるクラックの横にもそれはある。

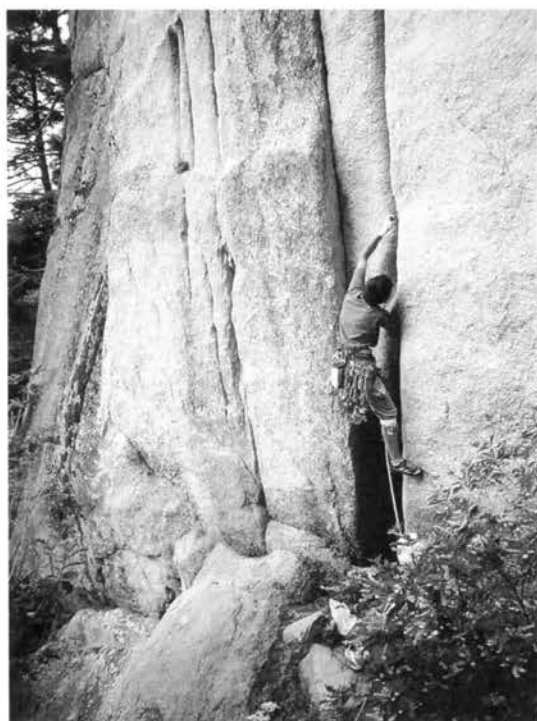
奥秩父で新しいボルトの波にのまれなかったのは瑞牆山の岩場だけであつた。

瑞牆山の岩場には（カサメリ沢をのぞいて）ミニマムボルトで登ろうという伝統がある。プロテクションとして、まず自然物を使い、次にナッツやカム、それが使えなければハーケン、ボルトを打つのは最後の手段、最

小の本数にしようという意志（まあ、瑞牆山にルートを開拓しようなど考えるクライマーなら誰でも常識として持っていたのだ）。十一面岩の「春一番」「微笑み返し」「右岩稜」など南裏が世界標準と評するルートはそのような意志の元に開拓された。後に不動沢で、十一面岩で、大ヤスリで、意志は継承され続け伝統となったのである。国内でミニマムボルトの伝統を守っている岩場は少ない。瑞牆山の岩場が持つ最大の魅力であり、次の世代に修行の場として残すべき遺産であると言ええるだろう。

私は不動沢の開拓が一段落してから結婚し、三人の息子を育ててきた。子育ては楽しかったが大変でもあり、岩場での成果はほとんど上げることができなかった。しかし、幸せなことに二男と三男はクライミングに目覚め、今では一緒に登るようになった。親として彼らがどんなクライマーに成長してほしいかと問われれば「遅いクライマー」と答えたい。もつと具体的には「未知の岩場にルートを切り開ける勇気と体力、技術を持ったクライマー」になってほしいと思う。たとえ将来、彼らが岩登りをやめてしまったとしても、岩場を世界に、クライマーを人に換えれば願いは同じことである。

数年前、息子たちと「ジキル博士」を登ったことがある。ボルトの打たれたフェイスなら5・12をリードしていた彼らは、5・8の「ジキル博士」をリードすることができなかった。その後彼らは腕を上げたが、5・13をレッドポイントするようになった今でも、5・9や10のクラックでしばしば敗退している。「かせひき」、「よろめき」、そして「ジ



カムを使ってクラックを登る

も同じような苦勞を要求され、初登攀者の勇気や集中力を感じ取ることができるよう。若いクライマーには是非経験し、乗り越えてもらいたい。

人工壁が普及し、誰でも気軽にクライミングを始められるようになった。レベルアップ

キル博士」。いったい何故だろうか。おそらくプロテクションが取りにくかったり、上部がどうなっているか見えなかったりするルートが怖いのだ。

未知のクラックに取り付く時のプレッシャーは大きい。少なくとも私はそうだった。自分の限界グレードに挑む時や初登攀なら尚更である。何よりも不安なのはプロテクションが取りにくいことだ。同じサイズのクラックが続けば手持ちのカムなどすぐに底をつく。大墜落や行くしかない状況に陥ること想像し、初登攀にでかける朝、私はいつも腹の具合が悪かった。だからこそ目標とする岩場は写真を撮り、いろいろな方角から双眼鏡で観察して戦術を考え、装備を磨き、時には自作して気合いを入れて登っていた。

ミニマムボルトのフリークライミングルートとは、多かれ少なかれそうした苦勞を乗り越えて開拓されたのである。クラックの横にボルトが無ければ、続登者

もめざましく、才能のある若者ならば短い期間で5・12や13に到達する時代である。知り合いの中学生はクライミングを始めて一年で5・13を登ったそうだ。素晴らしい成果だと思う。しかしクラック、特にワイドクラックはとても一般的になったとはいいがたく、十代の若者で登る者はOに近い状況である。取り組む者が少ないのは寂しいが、逆にチャンスでもある。クラックを克服できたなら、彼らはもつと遅くなれるに違いない。瑞牆山の岩場は、今でも世界の高山へ大岩壁へと繋がっている。ミニマムボルトの伝統が受け継がれる限りこれからもそうであり続けるだろう。

クラックの横にボルトはいらないのだ。

（長野県山岳総合センター専門主事）

種をまくタヌキ

平澤 瑞穂

2004年の春、野生のタヌキの生態調査を始めました。調査地は東京都西多摩郡日の出町。奥多摩の山林と関東平野が接する場所です。都心から近いながらも自然豊かな場所です。

タヌキは、「里山」を代表する野生生物であり、お寺や民家の軒下に巣をつくるなど、人間社会と近い場所で生活してきました。人間の手が適度に介入することで生態系が保たれていた里山では、人も野生動物もお互いが必要な存在であったと思います。

全国的に都市化が進み、日の出町もこの数十年間で新興住宅地が拡大しています。人間が里山の生活をやめ、山を開発するようになってからの彼らの生活は大きく変わったのではないかと思います。タヌキを調査したのは、彼らが現在どのような生活をしているのか、興味を持ったからです。しかし、タヌキは基本的に夜行性なので、日中に姿をみることは困難です。確実に観察できるのは、彼らの「糞」くらいです。そこで私は、タヌキの糞を分析することにしました。

タヌキには「ため糞」という、複数の個体が数箇所の特定の場所に糞をする習性があります。視界の開けた登山道の真ん中や、藪だらけの急斜面でする場合もあり、彼らがため糞場として好む場所に統一性はみられません。私の調査に協力してくれたタヌキのため糞場は少なくとも10箇所あり、毎月30個以上採取することを目標にしました。採取した糞は、

目の細かいふるいで洗い、残った残留物を顕微鏡で分析します。結果は、予想外のものとなりました。

よく食べていたのが、植物質で、次いで動物質、農作物や生ごみも少量見られ、ビニールやゴムなどの人工物も少しありました。

月別で見ると、葉や茎などの植物は1年を通じて頻繁に食べられ、特に多いのは、3、4月でした。昆虫は4、9月に集中し、果実やキノコなどは、8、12月に多く見られました。農作物は、1、2月に集中しています。

ビニール、プラスチックなどの人工物は12、3月に多くみられました。鳥やネズミなどは、5月、12月、3月に見られました。もともと狩りが得意ではないタヌキの特徴を考えると、たまたま捕まえることができたか、偶然死骸を見つけて食べたのではないかと考えられます。

これらをまとめると、葉や茎などの植物は年間を通して食べながらも、初夏、秋、昆虫の活動が活発になり始める頃には、植物の摂取量は減り、代わりに昆虫が餌の中心に変わっていました。晩秋、昆虫食から一気に果実が中心に変わり、餌の約75%を占めるようになります。冬は果実が減り、再び葉や茎などが増え、次いで人工物も増えていました。

全体的にみると、動き回る動物よりも確実に手に入る植物を中心に食べるということがいえます。しかし、森に昆虫や植物、果実が豊富にある時期のタヌキの糞の内容物を見

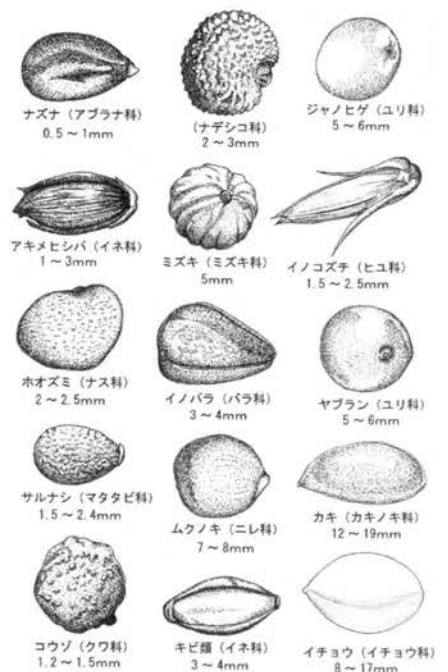
ると、好物、または栄養が高いであろう昆虫や果実をまず先にたくさん食べ、年中食べることができ植物は後回しにするという、グルメな一面があります。また、餌の乏しい時期は民家の農作物を食べて、環境にうまく適応しています。

私が分析中に注目したのは糞の中から出てきた果実の種子です。堅い殻に覆われている種は消化しきれずにそのまま排泄され、時期が来ると芽を出し始めます。どれほどたくさんの種子がタヌキによつて種の分散と発芽を成功させているのかわかります。(図)

日の出町の山も徐々に少なくなってきましたが、タヌキたちは人間社会から出た残飯や農作物にほとんど頼ることなく、自然界のものを食べていることがわかりました。身の危険を冒してまで、人間社会のスペースに入り込み、餌をとる必要は今のところないようです。このことは、山が豊かであることを意味しています。

調査を始める以前は、タヌキたちがこれほど自然界の餌に頼って生きているとは思わず、餌の大部分を残飯に頼っているのではないかと予想していました。

激変する環境にも、タヌキたちは自然の中で懸命に生きてきたことを実感させられます。日の出町のタヌキたちは、残飯などに依存せずにくらしていますが、開発が進んだ地域で



(図)糞から出てきた植物の種のスケッチ(筆者・画)

はそうはいかないかもしれません。さらに都心にいけばタヌキ自体が生きていくスペースはあるのでしょうか。環境が悪くなっているのは、誰からみてもわかることです。もつと彼らに目を向けなくてはならないと思うのです。限られた厳しい環境で懸命に生き抜くタヌキたちがいてくれるという事実をこのまま見過ごすのはとても残念です。野生のタヌキたちの力強さをまじまじと感じ、彼らが少しでも本来のくらしを取り戻せるようになってほしいと願わずにはいられませんでした。

(株式会社セルコ)

山と博物館 第52巻 第10号

発行 千 二〇〇七年十月二十五日発行
長野県大町市大町八〇五六―一

市立大町山岳博物館

TEL 〇二六―二二〇二二

FAX 〇二六―二二〇二二

E-mail: sanpaku@city.omachi.nagano.jp
URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpaku/印刷 奥村印刷
定価 年額一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)
郵便振替口座番号 〇〇五四〇一七―一三三九三